

5月12日

「丹後・若州・越州、浦辺波を打ち上げ、在家ごとごとく押し流す、人死ぬ事数知らず」と云々——」
これは、戦国時代の京都の神主吉田兼見の日記「兼見卿記」の一説だ。1586年の天正地震の際、大津波が京都から福井にかけて若狭湾沿岸を襲い、民家を押し流し、数え切れない死者が出たと記されている。
しかし、400年以上前の記録のため、この津波の実態はよく分かっておらず、福井県の地域防災

古い文献 再検証進む

計画には反映されていなかった。東日本大震災を受け、同県は津波の被害想定の見直しを始め、「兼見卿記」などの過去の文献も調べ直している。

過去の津波の記録は各地に残されており、今回の震災を機に再検討されている。
すなわち地震・土生・崖壊しや在家より壊れ多
此より丹後 若州 越州 浦を修りより 在家
若狭湾へよりよりを襲い、江州 若州 若狭
みよ、
天正地震で若狭湾に津波が襲来したことを記す古文
書「兼見卿記」の一部(東京大学史料編纂所蔵)

証が進んでいる。慶長三陸地震(1611年)では、これまで信頼性が疑問視されていた史料があったが、今回の震災の被害状況などと照らし合わせると「十分信頼できる」という研究報告も出ている。

同地震を調査している東北大学の蝦名裕一・教育研究支援者(日本史)は「古文書には、先人たちが大災害に直面しながらも、克服していく姿も記されている。復興という視点からも、様々な史料を読み直すことは重要だ」と話す。